



我参加了孔子的家乡旅游

汉语初级Ⅱ、广东话入门Ⅱ 増田 由江

今回の「孔子のふるさとを訪ねる旅」は、私にとって色々な意味で新しい体験でした。



昨年、ゼロから中国語を学び始めましたが、今回の修学旅行は初の本場中国への旅でした。憧れていた中国の地が、飛行機ではあっという間に行け、また新しく美しい、北京空港の大きさに驚かせられました。

北京・済南・曲阜・臨沂・青島と、全て初めて行く地で、不安もありましたが、何処もとても良い思い出になりました。

私が今回の修学旅行で、一番印象に残っているのは、曲阜での観光と、北京の孔子学院本部の訪問です。

曲阜でのバス車窓から眺める田園風景、農村の人達の生活を直接見て、決して日本と比べて裕福とは言えないけど、ゆっくりとした時と温かみを感じました。



孔府、孔廟、孔林、そして孔子の誕生した地に行き、今まで孔子についてはよく知らなかったですが、改めて興味を持ちました。普段の観光旅行では出来ない、大変貴重な経験でした。

また、曲阜で最もにぎやかな、鼓楼街を散策し、露店で中国語での買い物に挑戦しました。

量り売りの焼き芋と、甘栗を買いました。あまりの安さに、つたくさん買って食べてしまいました。



北京の孔子学院本部訪問では、文化センターでの体験、初めて自分で考えた中国語での自己紹介、そして約300名の英国の学生さんにも同窓し、今、中国語を学ぶ人のスケールの大きさを感じました。

夏に開催されたオリンピックの会場を実際見たり、王府井でのショッピングでは、書店で本やCD・DVDに時間を忘れてしまう程夢中になったり、ラッシュアワーに乗った地下鉄では、現地の人に間違われて、場所を尋ねられたり、楽しい時間を過ごせました。



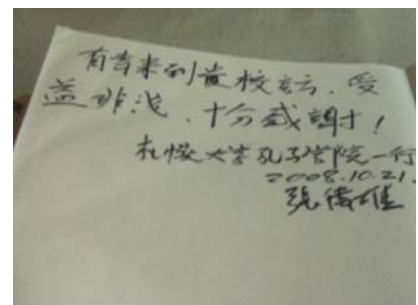
そして、北京、青島での車の多さと走行には驚きました。日本では考えられないルールで、道路を渡るのも一苦労でした。



中国は日本と近い距にありながら、違う文化や環境を見て、より一層、歴史の深さを感じ、更に中国語、中国の文化に興味を持ちました。

学院長先生、そして皆さんと過ごした8日間は、大変良い思い出になりました。

香港、台湾旅行がきっかけで中国に興味を持ち始め、今、札幌大学孔子学院で中国語を学んでいることに、改めて感謝しています。



“論語”二つの風景

初級Ⅲ 松坂哲夫

論語に出会ったのは旧制中学に入学した昭和19年の春。これまで目にする事のなかった英語や漢文の教科書と対面した。ページをめくりながら、念願の中学校入学を果たした喜びと、未知の学習への期待と不安もまじえ、緊張に身が引き締まった。太平洋戦争はすでに敗色が濃かった。

「学而時習之、不亦説乎……」

今も指導の磯部先生の声の中にある。

朗々とした美しい範読と、時には瞑想しながら、熱く解説する先生の授業にみんなが引き込まれた。

私は慣れぬ漢字文を目で追ひ、耳新しい韻律の美しさの中で、孔子の時代に想像を巡らした。

あの古くうす暗い木造教室とともに、今なお消えることのない少年期の映像である。

☆

中学2年の夏、敗戦。動員先の工場から学校へ帰り授業が始まる。国は混乱し世は荒んでいた。

窓から降り降りする汽車通学の2時間。途中の美唄駅では、炭坑の強制労働から解放されたアメリカ人、中国人がよく乗り込んで来た。怖かった。教えられた通り、目を合わせないようにした。

ある日、中国人と思われる青年が近づいてきた。通路に立って教科書を読むわたしと友人に、

「あなたたちは学生ですか？」

きれいな日本語だった。怖々返事をする、
「何を読んでいるのですか。見せてください」
おそろおそろ墨塗りの教科書を差し出した。

ひと時あって、その人の目が輝き、
「あなた方は、論語を勉強しているのですか？
そうですか、そうですか……」とうなずきながら
ページを追うその目が次第に和んでいった。

いくつか学校のことを聞いたあと、英語の教科書にも目を通し、仲間の一人を招き囁いた。

やや年配のその人は、急に笑顔になり流暢な英語で話しかけてきた。しかし、残念ながら全く聞き取れなかった。

若い方が人が通訳をしてくれた。

「わたしたちは日本の学生が、論語を勉強していることを知って、とてもうれしいです」

「中国と日本は古い時代から交流のあった国です。論語を学習して、中国をもっと知ってください」
さらに、「戦争が終わったので、これからはきっと、

外国との行き来も出来ることでしょう。今は勉強して大きくなったら、是非中国に来てください。」

通訳が終わると、英語の人は、満面の笑みで、またひと言付け加えた。

「その時はわたしが中国を案内しますよ」と。

下車する駅が来たことを告げると、二人の中国人は、交互に握手をしてくれた。温かい手だった。

駅から家までの田舎道を歩きながら考えた。

「戦争って、何だったのだろう？」

「戦争で失ったものは？」

「外国や外国人の認識と事実の違いは？」

「教養ある人の世界観、人格や態度」等々。

次々と自問をくり返すうち、戦争に敗れた悔しさより、恥ずかしさや空しさがこみ上げて、ひとりでに涙が滲んできた。

☆

「有朋自遠方來……」

曲阜の宿「阙里賓舍」に着く。玄関上方に掲げられた論語の大刻字が迎えてくれた。

中学時代の授業風景が頭に浮かび、これまで想像もできなかった、孔子出生の地で、今論語の一節を口ずさんでいる事実、最初の感動を覚える。

滞在中は歩いていねいに街を歩き、孔子廟や夫子洞など、遺跡を前に春秋の時代に思いを馳せた。

また曲阜師範学校の歴史や、孔子学園本部で出会った数百人の英国中学生を見ながら、2,500年も前の孔子の教義や思想が、今なお世界の人々を教化している事実の偉大さに感嘆した。

今回“孔子の故郷を訪ねる旅”と聞き、海外旅行を諦めていた私の旅心が、再び掻き立てられた。

さかのぼれば、今こうして中国語を学び、中国に特別な親しみや関心を持つのも、この二つの思い出に源があるのかも知れない。

少年期から消えることのない強烈な原風景に、60余年の人生を重ね、その原点となる地を訪ねてみたい欲求を、ついに抑えきれなかった。

年齢を考え幾度も躊躇したが、期限直前、身勝手にも“同学”のよしみで仲間に入れて頂いた。

今回この企画で機会を与えてくださった学院や、引率くださった張学院長先生、ご一緒させていただいた皆さんに、心からの感謝を申し上げたい。

<2008.11.20>

楽しかった 8 日間の旅

「孔子のふるさとを訪ねる旅」は、私には有意義で充実した 8 日間でありました。私は今回の旅行に当たり、孔子の歴史を学ぶことと同時に、その最大の目的を中国語のレベルアップを図るための[中国語学習短期集中講座]にすることとしました。

そのためには積極的に多くの中国人に話しかけてみる、そこで少しでも会話が成立することができれば自信にもつながるし、中国人の市民感覚や市民感情の一端にも触れることができるのではないかと考えたからです。

そこで私が会話を試みたのは、ガイド、機内での客室乗務員、ホテルマン、レストランやコンビニの従業員、脚踏三輪車の親方、屋台のおかみさん、武装警察、北京空港のトイレ掃除の人、農村でのお婆さんと 8 才の孫、そうしてショッピングでの値引き交渉などでしたが、大変よい経験になったと実感しています。

こうした小さな交流の中で

- ・北京の若者には「小日本真厉害」という複雑な対日感情があること
 - ・少しでも言葉が通じるということが、人と人の距離感を縮めることを再確認したこと。即ち日中の不断の交流が大切だということ。
 - ・「おもてなしの心」には物足りないけれど、友好親善的に接しようとする思いが伝わってきたこと。
- などが印象に残っています。

孔子の歴史の面では、五岳の泰山を遠望し、三大建築の大成殿を仰ぎ見て感嘆し、少昊陵の前に立ち、春秋時代に思いを馳せ、中国の悠久の歴史の大地に身を置いたあの独特の感慨は忘れることはないでしょう。

馬淵 礼司 08. 11. 21

『孔子のふるさとを訪ねて』

森田 宏也

孔子のふるさととは、どんな所なのだろう？これまでいくつかの外国には足を運んではいるが、隣国中国を旅の目的地としては考えることなく過ごしてきた。それが今年1月から孔子学院中国語入門講座を受講するようになり、その学校が企画する旅行だということで、俄に心が動いた。孔子のふるさと曲阜がどこにあるのかも知らず、中国の地を初めて踏むことにした。

曲阜のマチに入ったのは旅程2日目の10月19日午後4時頃。東京とほぼ同じ緯度にあるこのマチは汗ばむ陽気だった。翌日、旅の主目的である孔子廟、孔府、孔林、孔子生誕地尼山など、孔子ゆかりの地を巡ることになる。孔子をまつる孔子廟や隣接する孔府は、われわれが宿泊したホテルに近い曲阜の中心部にあり、中国各地からの観光客と思われる人々で、平日にも関わらずかなりの込みよう。静かな雰囲気で見回れたら、とは思ったが観光スポットでそれを望むのは所詮無理な話であろう。そこから1km余り離れた孔林は、孔子一族が眠る広大な墓地だけに人をあまり気にせず巡ることができた。長い年輪を刻んだ樹木の茂る林の中にある墓は、孔子のをはじめ、子孫たちのが何万にもものぼるといふ。

孔子の生誕地尼山には曲阜のマチから40分ほどで着く。途中バスは細い1本道を道路脇の木々の小枝を払いながら進んだ。観光バスが入ることなど滅多にないだろう。こういう所まで運んでくれる、わが孔子学院ならではの

の旅程に感服する。孔子が生まれたと伝えられる小さな洞が、「夫子洞」と刻まれた碑の後ろに残されている。小高い丘からは今はダムになっている泗水の水面が望める。2500年も前という気の遠くなる昔、当時は流れていた泗水を眼下に、孔子が弟子たちに教えを与えた情景を想像してみる。われわれはその地に立つことができたのだ。

2500年以上経た今も、孔子の思想は論語として人の道を教えている。翻って、現今のわれわれの身の回りをみた時に、科学的な進歩は確かに認められようが、思考的に進化しているとは果たして言えるだろうか。学問を積み重ねているであろう指導者たちにより、世界のあちこちで戦いが繰り返され、飢餓や貧富の差も解消されそうにない。孔子は天空からこの現代をどのように見ておられるのだろうか？・・・孔子のふるさとから青島へと、雨の高速道路をひたすら走るバスの中で思ったものでした。



他では体験できないこのような旅行を企画してくださった孔子学院、そして張学院長自らが心強い引率をしてくださったことに深く感謝申し上げますとともに、同行の皆様の温かいお付き合いに厚くお礼申し上げます。そしてまた、再びこのような旅を楽しめる日が来ることを願っております。

孔子のふるさとを訪ねる旅

私は、中国語を習っているけど一度も中国に行った事が無かったので、行ってみたいなと思って今回の孔子のふるさとを訪ねる旅に参加しました。

一番楽しかったのは、曲阜と青島の移動の時、張先生がカンフーを教えてくれたのが一番楽しかったです。

初めて食べた食べ物はいっぱいあったけど、特に印象に残った食べ物はすいかの種です。曲阜のホテルで出ました。

張先生がカンフーの技と言ってキレイにむいていたので、わたしもやってみました。

最初はできなかったけど、最終的には張先生と同じ様にできるようになり、一番弟子です。

曲阜で、自分のお土産を買いました。

チャイナドレス(ピンク&青)とお財布(ピンク)とチャイナ服型ケータイケース(青)を買いました。

一番見ることが出来て嬉しかったのは、オリンピックの会場の鳥の巣です。

鳥の巣の写真は印刷して学校のクラス全員にあげました。

そして今回の旅のメイン孔子のふるすとは、「夫子洞」と言う祠でした。

吉岡 万織

万織に同行した私の一番の感想は「中国は広い」という事です！

今回旅をしたのはわずか北京と山東省です。それなのに直線で約 1000km もの距離でした。今度の旅で中国の全てを知りたくなりました。

吉岡 斉

以上

(No.2)